

街の農地 守りたい

タカ飛来、希少なカエルも生息 名古屋・守山区



合員である地権者の3分の2の同意で決定した。野田農場がこの場所で耕作を続けられるのは来年までだが、一家はそれ以降も移転しないまま農業を続けたいと願っている。

妻の幸子さん(60)が指さす水槽には、イチヨウの葉のよな数々のコケ「イチヨウウキゴケ」が浮かんでいる。水面に浮遊する唯一のコケ類で、環境省のレッドリストでは絶滅のおそれが極めて高い絶滅危惧1類に分類されている。かつては日本中の田んぼで見られたが、農業などの影響で姿を消しつつあるという。幸子さんが、夏に田んぼに浮いていたものを土や水ごと水槽に入れておいた。

守山区中志段味地区で11代続く「野田農場」。専業農家の野田輝己さん(61)夫婦と娘夫婦の家族4人が減農薬で米や野菜を育て、豊かな水や肥えた土に恵まれた農場を守ってきた。その1畝余りの農場が、1995年から始まった

区画整理事業で移転を求められている。地区の区画整理は約192

希少種のナゴヤダルマガエルやイシガメ、ドジョウなど多様な生き物が息づく。キツネが獲物を求めて訪れ、オオタカが羽を休めに降り立つ。

「うちの田んぼでは普通に

区画整理事業で移転を求められている。地区の区画整理は約192

帯はほかにも農業を営む人が多かった地区で、かつては農地が広がっていた。スーパーなどの商業施設を誘致して住宅地にする計画で、組

われてるんですよ」

農場の隣には、防風林の役割を果たしてきた竹林が茂る。そこには、高さ15メートルほどの常緑樹クロガネモチが伸び、無数の赤い実をつけていた。

区画整理で 移転の危機



野田農場の田んぼに浮いていたイチヨウウキゴケ



農場に隣接する竹林に囲まれたクロガネモチの木は、いずれも名古屋市守山区中志段味

シンプジウムでは、動物写真家の小原玲さんが「名古屋市内で、野田農場は天白区の平針の里山や相生山緑地と同様、自然の豊かなスポット。こうした里地や里山をせひ残してもらいたい」と訴えた。

輝己さんは「住宅地の道路脇にクロガネモチだけ残しても生き物は来ない。農場を含めた全体を里地として残さなければ。都市で農業を続けられるような、農地や緑地のことを考えた街づくりを考え直してほしい」と話す。

昨年12月中旬の守山区のタウンミーティングでは、河村たかし名古屋市長が「クロガネモチは残したい」との意向を示したという。組合のコンサルタントをする名古屋都市整備公社は「協議中だが、クロガネモチや農場についての要望も考えながら事業を進めていく」と説明する。

区画整理事業が進む名古屋守山区で、広大な田畑が土砂で埋め立てられる中、1軒の専業農家の農地が残っている。移転せずに自然と共生する都市の農地を守りたい農家に対し、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を控えた名古屋や区画整理組合の対応が注目される。30日には、農場と支援するグループや研究者が、都市農業や生物多様性をテーマにしたシンポジウムを開いた。

(川田俊男)